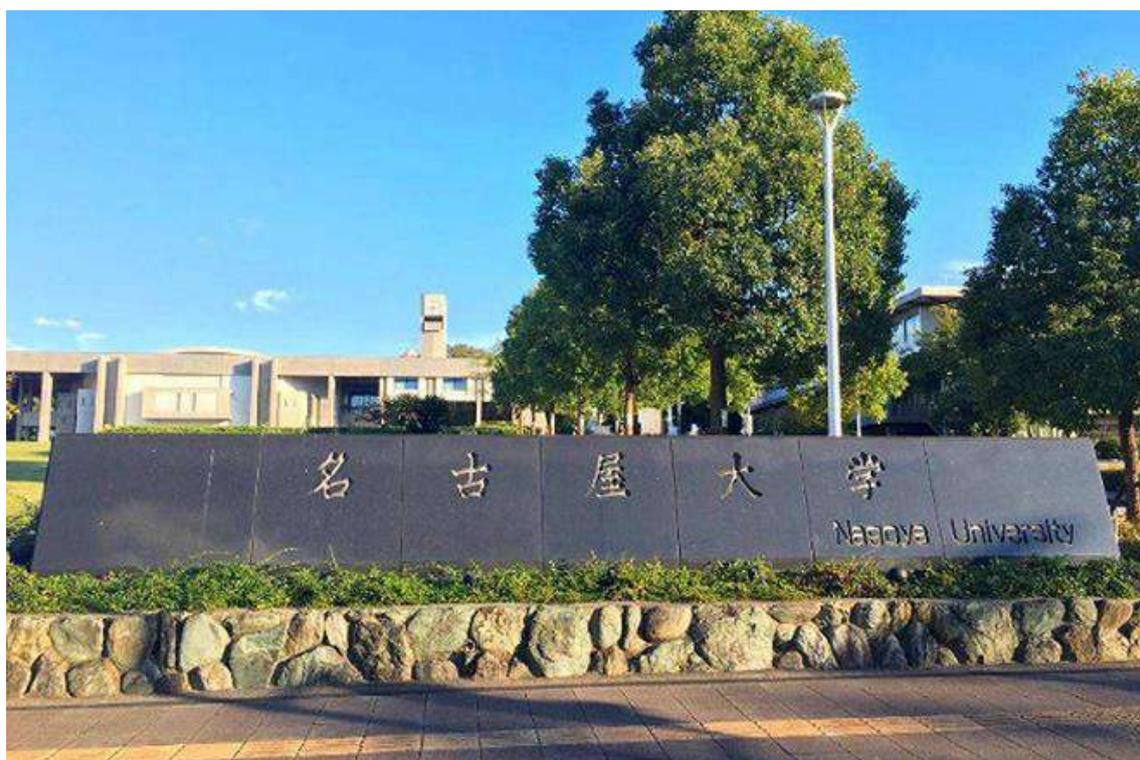


【日本の大学】第7回——名古屋大学：「自由闊達」が高い研究力生む

名古屋大学は創立当初からの「自由闊達」な学風を伝統として受け継いでおり、2000年に制定した大学学術憲章に掲げた二つの基本目標である「創造的な研究活動によって真理を探究し、世界屈指の知的成果を産み出す」「自発性を重視する教育実践によって、論理的思考力と創造力に富んだ勇気ある知識人を育てる」もその伝統が裏打ちされたものである。



名古屋大学正門（写真：張璐琦提供）

多くのノーベル賞受賞者生む

21世紀に入ってからノーベル賞を受賞した日本人13名のうち6名が名古屋大学の関係者であることも、大学の研究力が「自由闊達」な学風の下で花開き、世界水準にあることを如実に示していると言えよう。

2020年4月1日には、名古屋大学は同じ国立大学の岐阜大学と国立大学運営法人を統合し、日本で初めて「東海国立大学機構」を誕生させた。従来、国立大学は1法人が1大学を運営することが国立大学法人法で定められていた。しかし19年5月に法改正され、1法人の傘下に複数校が収まる「アンブレラ方式」が解禁され、同機構がその第1号となった。

同機構の機構長に就任した名古屋大学の松尾清一学長は「今までにない国立大学をつくりだし、これから変わっていくであろう日本の大学のプロトタイプ(原型)の一つにしたい」と抱負を述べた。

全国の国立大学は、重点的に取り組む教育や研究内容によって(1)地域のニーズに応じて自治体や企業に貢献する中核の役割を果たす大学(2)強みや特色のある分野で世界的な教育研究を推進する大学(3)世界最高水準の教育研究を行う大学——の3類型に分かれている。名古屋大学は(3)類型であり、岐阜大学は(1)類型に分類されている。松尾機構長は「地方も国際化が進む時代である。大学が果たすべき役割は、地域に根ざすだけ、国際的に競争するだけでは不十分だ。統合によって『第4の類型』を目指したい」と述べている。



豊田講堂

以下、大学のホームページの総長挨拶などから現状や歴史を見ていこう。

近年、取り組んでいるのが、国際化、男女共同参画、社会貢献である。国際化に関しては三つの視点がある。第1が、欧米重視の一極的な視点から多極的な視点への転換。日本が位置するアジア地域は、今後世界を牽引する巨大なポテンシャルを持っており、アジアとの連携・共生なしに日本の未来はない。大学ではすでに、アジアを含む世界各地に多くのプロジ

ェクトを展開している。第 2 が双方向的な人材交流の活発化である。海外から受け入れている留学生総数は約 2600 名で、全学生数約 16000 名の約 16%になっている。一方、大学在学中に長期短期を問わず、海外での経験をした学生の比率も年々増加している。こうした双方向の人材交流を積極的に行うことによって国際的な視点を持った人材とネットワークを作っている。第 3 は、国際化を支える英語教育の強化である。様々な語学プログラムによって日本人の学生を支援するとともに、1140 もの講義コースが英語で行われていて、英語のみで修了できるカリキュラムも増加している。



名古屋大学祭り

男女共同参画に取り組む

大学ではまた、男女共同参画にも積極的に取り組んでいる。保育所の整備にとどまらず学童保育の導入も全国の国立大学に先駆けて行っている。女性研究者の採用枠の拡大や支援もしており、全国から優秀な女性研究者が集まるようになっている。国際交流事業にも女性が積極的に参画しており、社会から高い評価を受けている。

ものづくり産業の集積が最も進んだ地域でもあるため、その中核大学として社会から極めて大きな期待が集まっている。地域への貢献と国際化は決して矛盾した概念ではなく、むしろ両者は相乗的に効果を発揮できる関係にあると考えられる。国、地方自治体、産業界、大学、市民と密に連携して、未来に向かって活力ある地域を創造し、世界との交流を推進す

るために様々な連携事業を展開している。

名古屋大学の歴史は明治の初め 1871（明治 4）年に名古屋県（一説には名古屋藩）が設立した仮病院・仮学校である。その後、紆余曲折を経て、1881（明治 14）年には愛知医学学校と改称し、さらに 1903（明治 36）年には愛知県立医学専門学校に、1920（大正 9）年には県立愛知医科大学へと発展した。

大都市となった名古屋市に総合大学を設置することは、地域の人々が長年熱望し、その必要性を訴え続けてきたが、ようやく 1931（昭和 6）年に、愛知医科大学の官立移管により名古屋医科大学の創立が実現。1939（昭和 14）年、名古屋帝国大学の創立につながった。巨額な創設費はすべて愛知県からの寄付によって賄われたという。

当初、医学部と理工学部の 2 学部で発足し、1942（昭和 17）年に理工学部を理学部と工学部に分離、その翌年には航空医学研究所を設置した。しかし、戦争が激化し、名古屋空襲によって甚大な被害を受けて 1945（昭和 20）年の敗戦となった。

戦後の民主化と復興の槌音の中、1946 年航空医学研究所を廃止して環境医学研究所をつくり、翌 47 年に名古屋大学に改称、48 年には文学部と法経学部が創設されて、名実ともに総合大学となった。

さらに 1949（昭和 24）年、学制改革によって、新制大学として再出発した。当時は、文、教育、法経、理、医、工の各学部と環境医学研究所、空電研究所（現在の太陽地球環境研究所）からなり、同時に第八高等学校、名古屋経済専門学校（旧名古屋高等商業学校）、岡崎高等師範学校などを吸収した。翌年には法経学部を法学部と経済学部に分離、翌 51 年には農学部を設置した。1953（昭和 28）年には新制大学院を、55 年には医学と農学の 2 研究科の設置により、すべての学部に大学院が置かれた。



名古屋大学附属病院

施設を東山に集結

戦後の混乱、物資の窮乏、財政のひっ迫といった困難の中で、教職員、学生、卒業生らが力を合わせて、戦災からの復興と各地に分散していた学部施設を東山に集結させていった。本格的な講堂や図書館も民間の篤志によって次々に建てられた。1960（昭和 35）年には大学のシンボルである豊田講堂が、1964（昭和 39）年には古川図書館（現在の古川記念館）ができた。次いでプラズマ研究所、水圏化学研究所などの教育研究組織も拡充された。



東山キャンパス

1990年代以降、学部を基礎を置かない大学院独立研究科の創設も相次いだ。国際開発研究科（1991年）、人間情報学研究科（92年）、多元数理科学研究科（95年）、国際言語文化研究科（98年）、環境学研究科（2001年）、情報科学研究科（2003年）をそれぞれ設置した。

また、既設学部についても大学院重点化によって、大学院を中心とする組織に改組。学部の教育体制の面では、1993（平成5）年には教養部を廃止し、翌年から4年一貫教育を導入

した。9番目の学部として情報文化学部（同年）も設置している。

2004（平成16）年、他の国立大学と同様、国立大学法人名古屋大学として新たなスタートを切り、その後、エコトピア科学研究所（2005年）、さらに同研究所を未来材料・システム研究所に改組、宇宙地球環境研究所を新たに設置した。

現在は、9学部（文、教育、法、経済、情報、理、医、工、農）、研究科14（9学部研究科のほか、国際開発研究科、多元数理科学研究科、環境学研究科、創薬科学研究科など）、附属研究所3（環境医学研究所、未来材料・システム研究所、宇宙地球環境研究所）、全国共同利用施設3などを擁している。教職員は4千名弱、学部学生9600名、大学院学生6200名（うち外国人留学生2640名）である。

キャンパスは、鶴舞、大幸、東山の3キャンパスがあるが、前の二つは附属病院、医療看護関係の入り、そのほかの学部、大学院などはすべて名古屋市の東方にある東山キャンパスに集中している。

名古屋大学に関するノーベル賞受賞者は次の通り（敬称略）。

受賞年	受賞者	受賞理由	肩書き
2001年 化学賞	野依 良治	キラル触媒による不斉水素化反応の研究	科学技術振興機構センター長 名古屋大学特別教授
2008年 化学賞	下村 脩 (2018年10月 死去)	緑色蛍光タンパク質の発見と開発	理学博士（名古屋大学）
2008年 物理学賞	小林 誠	クォークが自然界に少なくとも三代以上あることを予言する、対称性の破れの期限の発見	理学博士（名古屋大学）
	益川 敏英	同上	理学博士（名古屋大学）
2014年 物理学賞	赤崎 勇	明るく省エネルギーの白色光源を可能にして高輝度の青色発光ダイオードの発明	工学博士（名古屋大学）
	天野 浩	同上	工学博士（名古屋大学）

日文：滝川 進

写真：出典記入なしは全て名古屋大学 Facebook から

翻訳編集：JST 客観日本編集部